

# 画業 70 年 和田貢

2016年 6月 29日(水) – 9月 4日(日) 会場：常設展示室

\* 月曜休館 ただし7月18日(月・祝)、8月15日(月)は開館、7月19日(火)は休館  
 \* 和田貢氏によるギャラリートーク 7月 9日(土) 午後2時より  
 \* 学芸員によるギャラリートーク 8月19日(金) 午後2時より



25.《幕間》2003年

《幕間》(2003年)(N0.25)は、和田貢(1927～)の第35回改組日展出品作である。

二人の人物の表現には、彼の確かなデッサン力が、如何なく発揮される。そしてその立像と坐像を巧みに組み合わせて構築性のある画面が作りあげられている。また、背景となる黄色と青色のコントラストが、画面全体に輝きをもたらし、画家の豊かな色彩感覚を物語る。デッサン力、構成力、色彩表現において、和田の代表作の一点といえるだろう。それは、この作品で日展会員賞を受賞していることから裏付けられる。

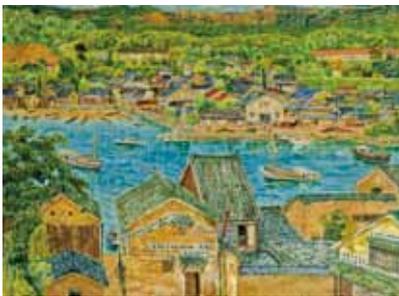
現在、和田は、こうして日展会員として活躍し、東光会では名誉会員として作品を発表、さらに、東光会広島支部代表、福山美術協会名誉会員として福山の文化の発展にも寄与し続けている。

彼は「とにかく、描くことが好きでたまらないんだから仕方ない」と絵画制作への情熱を89歳の今も喜々として語る。その情熱は、若かりし頃、小学校の教師として時間に追われる生活の中にあっても、カンヴァスにむかうことを促した。そしてまた、第4回NHK 図画コンクール(1960年)で、図工主任の優秀指導者として奨励賞を受賞するなどの実績は、教室での堅実な指導ぶりを証明する。その中で得た中央画壇における評価は、探究心あつてのものといえるだろう。

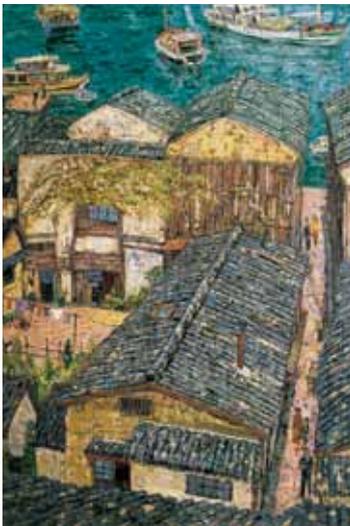
和田貢の絵画制作に対するこの情熱と探究心は、画家になる決意をもって絵画を描き続けて70年、片時も色褪せることはなかった。この度の所蔵品展ではその足跡を紹介する。



1.《自画像》1946年



3.《内海の漁港》1952年



6.《靱の家》1958年



8.《湖畔》1962年

## I. その始まり

和田貢は、1927年(昭和2年)、芦品郡近田村(現・福山市駅家町)に生まれた。幼い頃から、絵を描くことが大好きで、小学生の時には、絵具箱の蓋にカットとして描かれていた画家の後姿に、自分の将来を重ね合わせていたという。1945年(昭和20年)、広島県立府中中学校(現・広島県立府中高等学校)卒業後、画学生となるために上京を考えたこともあったらしい。しかし、絵画の実技講義が受けられる広島師範学校(現・広島大学教育学部)で学ぶ道を選んだ。この頃、光風会会員の清水良雄(1891-1954)の知遇を得た。

《自画像》(1946年)(N0.1)は、この在学中に描かれたものだ。徹底した写実と安定した構図には、早くも確かなデッサン力が発揮される。自分を見つめる鋭い視線は絵画制作に真摯に取り組む青年の姿そのものだろう。《広島城址(原爆の後)》(1947年)(N0.2)は、廃墟と化した広島に取材したものだ。和田が外堀を埋め尽くす蓮の葉に施す力強い筆致は、放射能をあびながらも新しく蘇生した生命の輝きを懸命に写しとろうしているかのように見える。和田の絵画表現の探究はこうして始まった。

## II. 靱の風景に培われた技と感性

和田は、広島師範学校卒業後の1949年(昭和24年)、広島大学広島師範学校女子部附属三原中学校(現・広島大学附属三原中学校)の美術の講師として、その教員生活をスタートさせる。そして靱を題材とする作品を手掛け始めた。彼にとって、路地が交錯するこの町並は構図的に興味深いものだったのである。さらに、自然と人々の暮らしが一体となった穏やかな風情にも創作意欲を刺激された。日展で活躍していた佐藤一章(1905-1960)に師事するのもこの頃からである。

その中で描かれたのが、《内海の漁港》(1952年)(N0.3)である。《自画像》(N0.1)と比較すると色使いに格段の違いがわかる。画面全体を優しい光で包む明るく透明感あふれる色使いは、和田が新たな色彩表現を手に入れたことを如実に表す。そして、画面下に配された家々の屋根によって人間の気配を漂わせた。その屋根の後方に、広がる輝く海、瑞々しい緑に覆われた山々を画面の中に巧みに配すことによって、人間と自然の共存が生み出す素朴で美しい光景が見事に写しとられている。和田はこの作品により第8回日展で初入選を果たす。この伝統ある公募展での入選は、彼に画家としての自信をもたらした。その自信は以後30回におよぶ入選作を生み出させ、日展会友、2度にわたる特選受賞、無鑑査出品、審査員を務めるなど、同展における活躍につながっていく。

初入選から2年後の第10回日展には、靱の町並みを俯瞰した構図の《靱風景》(1954年)(N0.4)を出品した。路にそって折り重なるように描かれた屋根に、ここに住む人々の絆の強さを感じることもできる。漁港の美しい地形を浮き彫りにするかのような海の輝きと屋根や壁、路の鮮やかな色彩が共鳴しあい、画面に軽やかなリズムが奏でられている。

こうして自分を魅了してやまない靱を描くことによって培われていく和田の技と感性は、1958年の第1回新日展出品作《靱の家》(N0.6)で、その構図に新たな展開を見せる。これは第3回安井賞候補としてその新人展にも出品された。一軒の家の屋根に焦点を絞った俯瞰の構図で、これまでになく力強さを画面の中に表出させている。大きく配された屋根によって、明確になる瓦の一枚一枚の色合いを和田はつづさにとらえ、瓦本来の灰色を基調に、補修跡の泥の茶色や漆喰の白色をところどころに施し、画面の中に色面による強弱をつける。中庭の物干し竿に規則正しく干された洗濯物、路に面して開放されている戸、細い路地をゆったりと行き交う人々など細部にわたり描き込まれた情景に、靱の暮らしぶりを楽しげに見つめる和田のまなざしも知ることができる。そしてこのまなざしが和田のモチーフを風景から人物へと移行させるきっかけとなる。

## III. モチーフの変遷

### ①靱の人々の暮らしぶり - 風景から人物への移行 -

日展に初入選の同年、東光展でも初入選をはたした和田は、その2年後には、東光会会友、その翌年に東光賞受賞、1956年(昭和31年)に会員なり、瞬く間に東光会の将来を担う中堅作家として頭角を現し始める。

## 第1室：画業70年 和田貢

●作家蔵 ○ふくやま美術館

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	所蔵
1	和田貢	(1927-)	自画像	1946	油彩, カンヴァス	53.0 × 45.5	●
2	和田貢		広島城址(原爆の後)	1947	油彩, カンヴァス	60.6 × 72.7	●
3	和田貢		内海の漁港	1952	油彩, カンヴァス	97.0 × 130.3	○
4	和田貢		鞆風景	1954	油彩, カンヴァス	145.5 × 112.0	●
5	和田貢		牡丹	1956	油彩, カンヴァス	45.5 × 38.0	●
6	和田貢		鞆の家	1958	油彩, カンヴァス	194.0 × 130.3	○
7	和田貢		鞆風景	1961	油彩, カンヴァス	130.3 × 162.0	●
8	和田貢		湖畔	1962	油彩, カンヴァス	130.3 × 162.0	●
9	和田貢		山	1963	油彩, カンヴァス	162.0 × 130.3	●
10	和田貢		火山	1966	油彩, カンヴァス	130.3 × 162.0	●
11	和田貢		漁夫	1967	油彩, カンヴァス	130.3 × 162.0	○
12	和田貢		漁夫	1968	油彩, カンヴァス	162.1 × 130.3	広島県立美術館
13	和田貢		港	1970	油彩, カンヴァス	130.3 × 162.0	毎日新聞福山支局
14	和田貢		離山	1971	油彩, カンヴァス	61.0 × 71.0	○
15	和田貢		海辺の人たち	1975	油彩, カンヴァス	130.3 × 162.0	福山市立駅家中学校
16	和田貢		少女たちのパレード	1980	油彩, カンヴァス	130.3 × 162.0	広島県立美術館
17	和田貢		二人の楽士	1981	油彩, カンヴァス	162.0 × 130.0	○
18	和田貢		水郷風景	1984	油彩, カンヴァス	130.3 × 162.0	株式会社もみじ銀行
19	和田貢		牡丹/雪景(裏面)	1985	油彩, カンヴァス	112.0 × 145.5	寶泉寺(駅家町近田)
20	和田貢		牡丹	1985	油彩, カンヴァス	72.7 × 91.0	●
21	和田貢		夏祭り	1986	油彩, カンヴァス	162.0 × 130.3	●
22	和田貢		パレードを待つ踊り子たち	1988	油彩, カンヴァス	162.0 × 130.3	●
23	和田貢		サーカスの娘たち	1992	油彩, カンヴァス	162.0 × 130.3	株式会社北川鉄工所
24	和田貢		牡丹	1997	油彩, カンヴァス	41.0 × 31.8	●
25	和田貢		幕間	2003	油彩, カンヴァス	194.0 × 162.0	○
26	和田貢		幕間	2004	油彩, カンヴァス	194.0 × 162.0	●
27	和田貢		奥入瀬溪流(秋)	2005	油彩, カンヴァス	91.0 × 72.7	●
28	和田貢		五月のりんご園(道後山麓)	2009	油彩, カンヴァス	72.7 × 91.0	●
29	和田貢		幕間	2011	油彩, カンヴァス	194.0 × 130.0	●
30	和田貢		ばら(ばら公園にて)	2013	油彩, カンヴァス	91.0 × 72.7	●
31	和田貢		幕間	2013	油彩, カンヴァス	194.0 × 162.0	●
32	和田貢		幕間	2014	油彩, カンヴァス	162.0 × 194.0	●

## 第2室：日本の近現代美術

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
33	岸田劉生	(1891-1929)	橋	1909	油彩, カンヴァス	33.6 × 45.7
34	岸田劉生		静物(赤き林檎二個とビンと茶碗と湯呑)	1917	油彩, カンヴァス	33.7 × 45.8
35	岸田劉生		晩春の草道	1918	油彩, カンヴァス	45.0 × 36.0
36	岸田劉生		新富座幕合之写生	1923	油彩, カンヴァス	31.9 × 41.0
37	岸田劉生		麗子十六歳之像	1929	油彩, カンヴァス	47.2 × 24.8
38	白瀧幾之助	(1873-1960)	帽子の婦人	1905-10頃	油彩, カンヴァス	72.3 × 53.0
39	南薫造	(1883-1950)	夏	1919	油彩, カンヴァス	116.7 × 91.0
40	須田国太郎	(1891-1961)	冬の漁村	1937	油彩, カンヴァス	48.5 × 59.7

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
41	梅原龍三郎	(1888-1986)	仙酔島の朝	1932頃	油彩, カンヴァス	65.5 × 80.5
42	安井曾太郎	(1888-1955)	手袋	1943-44	油彩, カンヴァス	89.3 × 72.8
43	小磯良平	(1903-1988)	婦人像	1969	油彩, カンヴァス	52.0 × 44.0
44	熊谷守一	(1897-1929)	女の顔		油彩, 板	41.0 × 32.0
45	高松次郎	(1936-1998)	平面上の空間	1982	油彩, カンヴァス	218.0 × 182.0
46	松本陽子	(1936-)	再び生命体について	2008	油彩, パステル, 木炭, カンヴァス	200.0 × 200.0
47	猪原大華	(1897-1980)	若桐	1927	絹本着色	209.0 × 190.0
48	児玉希望	(1898-1971)	暮春	1930頃	絹本着色	161.0 × 164.6
49	塩出英雄	(1912-2001)	露地	1973	紙本着色	173.7 × 242.1
50	作者不詳		姫谷焼色絵日輪竹文皿	17世紀後半	磁器	直径17.5 厚さ3.2
51	樂吉左衛門	(1949-)	黒樂茶碗 銘夜聴	2003	陶	口径13.0 高さ9.3
52	北大路魯山人	(1883-1959)	金銀彩武蔵野鉢		陶	口径27.5 高さ15.2
53	金重陶陽	(1896-1967)	一重切花入		陶	20.0 × 13.0 × 11.0
54	堀内正和	(1911-2001)	線C	1954	鉄, セメント	45.0 × 78.0 × 46.0
55	土谷武	(1926-2004)	植物空間VI	1990	鉄	64.0 × 57.5 × 41.5

### 第3室：ヨーロッパ美術

\*は寄託作品

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
56	モーリス・ユトリロ	(1883-1955)	雪のラバン・アジル	1916頃	油彩, カンヴァス	50.1 × 62.5
57	アルベール・マルケ	(1875-1947)	停泊船, 曇り空	1922	油彩, カンヴァス	38.4 × 46.0
58	パブロ・ピカソ	(1881-1973)	近衛騎兵 (17, 18世紀の近衛騎兵)	1968	油彩, パネル	81.0 × 60.0 *
59	パブロ・ピカソ		りんごとグラス, タバコの包み	1924	油彩, カンヴァス	16.0 × 22.0
60	ギュスターヴ・クールベ	(1819-1877)	波	1869	油彩, カンヴァス	34.5 × 51.8
61	ジュゼッペ・パリッツィ	(1812-1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870頃	油彩, カンヴァス	49.0 × 72.0
62	ジョヴァンニ・セガンティーニ	(1858-1899)	婦人像	1883-84	油彩, カンヴァス	120.0 × 87.0
63	メダルド・ロッシ	(1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス, 石膏	37.0 × 30.0 × 17.0
64	ジョルジュ・ルオー	(1871-1958)	ユビュ王	1939頃	油彩, カンヴァス	45.5 × 68.5
65	ハンス・リヒター	(1888-1976)	ベルナスコーニ氏像	1917	油彩, カンヴァス	60.0 × 47.0
66	クルト・シュヴィッターズ	(1887-1948)	抽象19 (ヴェールを脱ぐ)	1918	油彩, 厚紙	69.5 × 49.8
67	ウンベルト・ボッチョーニ	(1882-1916)	カフェの男の習作	1914	油彩, カンヴァス	58.0 × 46.0
68	ジャコモ・パッラ	(1871-1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩, カンヴァス	51.0 × 60.5
69	ジョルジョ・デ・キリコ	(1888-1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩, カンヴァス	80.0 × 60.0
70	ソーニャ・ドロシー	(1885-1979)	色彩のリズム	1953	油彩, カンヴァス	100.0 × 220.0
71	サンドロ・キア	(1946-)	少女	1981	油彩, パステル, 紙, カンヴァス	194.0 × 150.0
72	ルチオ・フォンタナ	(1899-1968)	空間概念-銀のヴェネツィア	1961	油彩, ガラス, カンヴァス	60.0 × 50.0
73	ピエロ・マンゾーニ	(1888-1978)	アクローム	1961	小石, カンヴァス	70.0 × 50.0
74	ペリクレ・ファッツィーニ	(1913-1987)	風 (踊り子)	1956-60	ブロンズ	139.0 × 80.0 × 90.0

### 和室展示：松本コレクション「ノンコウの赤」

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横 (cm)
75	樂道入 (樂家3代)	(1599-1656)	赤樂茶碗 銘 紫翠	江戸時代	陶	(高) 7.8 × (口径) 13.5 × (高台径) 6.3
76	樂慶入 (樂家11代)		赤樂茶碗 ノンコウ七種 鶴うつし	明治時代	陶	(高) 8.3 × (口径) 12.2 × (高台径) 5.7
77	樂宗入 (樂家5代)	(1664-1716)	赤樂舟釣花入	江戸時代	陶	(高) 8.7 × (口径) 21.8 × (高台径) 12.2
78	大村廣陽	(1891-1983)	赤インコに青薦	1920年代	絹本着色	145.0 × 49.6

この1950年代から1960年代にかけて、日本の美術界は、今井俊満(1928-2002)の登場など抽象絵画が全盛となった時代である。和田も、この流れを敏感に察知し東光展に抽象的な表現の《湖畔》(1962年)(N0.8)、《山》(1963年)(N0.9)、《火山》(1966年)(N0.10)を出品している。和田は卓越したデッサン力の対象を構成する本質的な形だけを抽出し、池や山の造形性をつかんでいる。そして、その色彩感覚を冴えわたらせることによって、自然が織りなす息吹を画面の中に表出させた。この頃は、佐藤一章の亡くなった年と重なりをみせる。和田は師を失った悲しみと心細さをこうした新しい表現に挑戦する事によって乗り越えようとしていたのかもしれない。そして森田茂(1907-2009)に師事するまでの約10年間、和田は自分だけでその絵画表現を模索し続けた。

こうして一時期、抽象表現にも目をむけた和田ではあるが、鞆の町並みに新たなモチーフを発見したためだろうか、やがて具象表現に戻る。「鞆の町を見下ろしてスケッチを続けているうちに、路地を行き交う人たちの動きが面白くなってきて、その暮らしぶりを描きたくなった」と彼は当時を振り返る。《漁夫》(1967年)(N0.11)、《漁夫》(1968年)(N0.12)、《海辺の人たち》(1975年)(N0.15)に描かれた群像は、その思いを根底にして取組み始めたモチーフである。

和田の人物の動きを的確に捉えるデッサン力は、漁夫たちの精悍な身体つきばかりかその生活の匂いさえ写し取る。そして、船溜まりの風景の中に、彼らを巧みに群像として構成し、互いに支えあいながら海と対峙する人々の暮らしぶりを見事に浮き彫りにする。それは画面に、穏やかな光を浴びるばかりではない自然との暮らしを生き抜く人間の逞しい生命力を漲らせるものとなった。

こうして、鞆の人々の暮らしぶりをとらえるようにしていき、和田はそのモチーフを風景画から人物画へと移していった。

### ②パレード -色彩表現の様々な探究-

和田は人物画を手がけ始めると、《少女の楽隊》、《アイルランドの楽隊》(1976年)、《アイルランドのパレード》(1977年)、《パレード》(1978年)などパレードを主題とした一連の作品を手がけるようになる。これは、1976年、ヨーロッパへ取材旅行に出かけた時に、ダブリンの街角で遭遇したパレードが基となっている。このパレードは、黄昏時の静かな街角に、突如現れ、一瞬にして華やかさをもたらしたという。和田は少女たちの躍動感の溢れる動きを素早くスケッチにおさめ、油彩画の中でもバランスよく配することによって、パレードの華やかなイメージを表出させている。

第12回改組日展で特選となった《少女たちのパレード》(1980年)(N0.16)では、旗手を先頭に、楽器を演奏する少女たちを交互に続け、画面に奥行きを持たせている。制服に施された青紫色を基調に、白色を巧みに強調し、夕暮れのダブリンの街角を行進する少女たちを鮮やかに浮かび上がらせている。

こうした白色を生かした色使いに、和田の色彩表現が、新たな展開を迎えようとしていたことを窺うことができるだろう。彼がパレードを題材にした色彩表現の探究は、紺色を背景に白色を効果的に使って歌手の存在感を強く印象づけた《二人の楽士》(1981年)(N0.17)、赤色や黄色を軽やかな筆致で塗り重ね、秋色に色づく葉を川面の煌めきとして映した《水郷風景》(1984年)(N0.18)、形を色で捉えるという手法によって満開の花の輝きを生み出した《牡丹》(1985年)(N0.19)、赤色を絶妙に際立たせた配色で踊りの熱気を表出させる《夏祭り》(1986年)(N0.21)といった作品の中でますます深められていくのがわかる。

これらは、「最近、色や光の輝きを絵の中で表現するよう意識している」(和田さん近作展「二人の楽士」福山で初公開『毎日新聞』1982年12月3日)という当時の和田の言葉を裏付ける。

### ③サーカス -虚構の中の現実感-

和田が探究する色彩表現は、《サーカスの娘たち》(1992年)(N0.23)で、その成果をみせる。この作品は第24回改組日展で特選となった。《少女たちのパレード》に続いて2度目の快挙である。多くの色を用いながらも、一定のまとまりを見せる色面は、個々の色の美しさを熟知した和田ならではのものだろう。



11.《漁夫》1967年



16.《少女たちのパレード》1980年



18.《水郷風景》1984年



19.《牡丹》1985年



23.《サーカスの娘たち》1992年



27.《興入瀬深流(秋)》2005年



32.《幕間》2014年

和田は、この数年前の1980年頃から、サーカスをモチーフに描き始め、現在に至っている。その舞台は表ではなく裏である。彼は、華やかな舞台の主役たちが素にもどる幕間をテーマに、ピエロを使って、人間模様を巧みに浮き彫りにする。

冒頭に記した彼の代表作の一つ《幕間》(2003年)(N0.25)の画面の主演は舞台を終えた達成感で生き生きとした表情をみせる女性である。ピエロは表舞台と同様に引き立て役のようにしか見えないが、表舞台で彼らが巻き起こす笑いが必要であるように、画面でも人間模様という一つの物語を生み出すために不可欠な存在となっている。ウクレレをつま弾きながら女性を見上げるピエロの目線、表情を通して、見る者はそれぞれにこの女性とピエロの物語をつくりあげることができるだろう。

ここではその動きが指先から足先にまで捉えられたピエロと、肩をはり姿勢よく起立する女性に彼のデッサン力が発揮される。女性の衣裳に施されたレースの透けた感じや服の皺まで捉えられた描写は鋭い観察力に基づくものだ。そして、画面に安定感をもたらす人物の配し方に和田の緻密な計算の基づいた堅牢な構成力を知ることができる。その豊かな色彩感覚は、背景のテントに施された青色と黄色の対比によってもたらされた画面の輝きに活かされる。

こうして、そのデッサン力、観察力、構成力、色彩感覚によって構築された画面は、これが実際に二人が並んでいたわけではなく画家が創りあげた虚構の場面であるにも関わらず、画面に現実感を漂わせ、見る者に物語を創造する喜びを与えるのである。和田が、サーカスの幕間を使って自らが創りあげた虚構の世界にもたらす現実感、その卓越した表現力を証明する。

近年の《幕間》(2013年)(N0.31)、《幕間》(2014年)(N0.32)における、やわらかな光の中の可憐な女性のピエロの登場は、このシリーズにおける新たな展開といえるだろう。

#### IV. 新たな色彩表現の予感

和田は、こうして、鞆の風景に技と感性を育み、その人々の暮らしぶりから新しいモチーフをひきだした。そして、パレードを主題とすることで、その色彩表現の様々な試みに着手する。これらのものを糧に和田はサーカスの舞台裏を使って様々な物語を紡ぎだす。美しい風景を写しだすことから始まった彼の絵画表現は、現実味を帯びた情景を創り出すということへと進化を遂げる。

和田は、福山市立短期大学の名誉教授になって6年後の1999年(平成11年)、72歳の時、アトリエを福山から東京へ移す決断をする。これは、師、森田茂の再三の誘いに応えたものだ。家族の理解を支えに構えた東京のアトリエからは、《舞台裏の道化師》(2002年)、《幕間》(N0.25)が誕生し、これらはそれぞれ、第68回東光展文部科学大臣奨励賞、日展会員賞の受賞という高い評価を受けた。

こうして約10年間の充実した東京での創作活動後の2008年(平成20年)、和田は福山に帰郷する。《五月のりんご園(道後山麓)》(2009年)(N0.28)、《ばら(ばら公園にて)》(2013年)(N0.30)は、その帰郷後に手がけられた作品である。そこには、東京在住時の《興入瀬深流(秋)》(2002年)(N0.27)で水が岩の上を滑るように流れる様子を白色で捉えたその輝きを彷彿とさせるかのように、りんごや薔薇が描かれている。画面からは、その花の豊潤な香りさえ漂うようだ。

これらの作品を前に彼はつぶやくように言った。「最近、特に大気の輝きを意識するようになった」— この言葉は、和田が足を踏み入れた新たな色彩表現の世界を予感させる。

(学芸課長補佐 宮内ちづる)

**【編集後記】** 和田真先生は、20年以上にわたって当館の「人物写生講座」の講師を務めています。裸婦または着衣の女性をモチーフとし、各受講者にあわせて鉛筆や水彩、油彩を教える、いつも抽選するほどの人気講座です。その人気の秘密は、人物全体のとらえ方の指導にあります。手足と顔のバランスやその動きの表現のアドバイスが的確なのです。自らも苦心したからこそ、説得力をもち、人々を惹きつけるのだと思います。会場にはその画業70年のエッセンスであるサーカス・シリーズも展示されています。じっくりと鑑賞していただければと思います。

(副館長 谷藤史彦)